４月１９日　サロン２１話題提供

戦意の研究

１７世紀前後、ヨーロッパでは２つの大きな進歩があった。自然科学の発達と軍事論の進歩。「戦意の重要性とそれを生み出す団体訓練原理」の発見。マクニールは「この発見は万有引力の発見に比すべき発見で、それ故ヨーロッパ軍が最強になった」と言う。

軍事変革時代
この時期の国王は有力者に資金供給し募兵させて戦った。

第一の軍事変革：軍事企業家・ワレンシュタインの登場。
　彼は軍事をビジネスに変え、皇帝資金により集めた傭兵を私兵化し、それを企業体として運営した。彼は武器製造業を起業し、原料その他を自分の決めた値段で強制的に買い上げ、低コストの武器を作って売り、その利潤で軍を運営・拡大した。「最高価格法」の原型。彼は道徳や体裁を完全に無視して、私利を追求した。彼は補給を作戦地域の掠奪で賄い、いかなる遠慮会釈も無かった。

第二の軍事変革：スウェーデン国王グスタフ・アドルフ

　彼は「戦争は戦争自体で賄うべき」とし、３０年戦争に参戦、外征を利益事業とし、占領地の掠奪による独立採算を採用。これもフランス革命の「飢えた民を軍隊に吸収し、外地に押し出して外地の犠牲において食わせる」の原型。アドルフの成功は、オランダ式の訓練と戦術の採用による。基本は団体訓練と野砲と歩兵の突撃だった。

　この野砲と突撃の連動も、ナポレオン戦法の原型。

マウリッツの団体教練

団体訓練とは、オランダ独立戦争においてマウリッツが考え出した「徹底した団体行動の反復教練」。マウリッツはスペインの精鋭歩兵部隊に促成の市民軍が如何に対抗できるかを考えた。その結果がマケドニアのアレキサンダー大王の父が、「出ると負け」の羊飼いの弱兵を最強の長槍密集方陣に育て上げた「団体行動による反復教練」を採用。人間は例え団体行進でも長く反復練習を続けると、連帯感が生まれ、団結心が芽生え、規律が生まれて簡単には逃げない精強さが生まれるという。

第三の軍事変革：常備軍

　３０年戦争後、王達は軍を解散させない方が賢明だと判断。常備軍を設置。以後貴族の反乱はなくなり、絶対王政は完成。だが常備軍はカネがかる。

ルイ１４世は市民階級出身のコルベールを蔵相に起用し、重商主義を推進する。

コルベールの重商主義
彼は農業を付加価値の高い葡萄酒生産に特化、葡萄酒を輸出し小麦を輸入した。こうして重商主義は成功し、華やかな宮廷生活を支えた。だが１６７５年以後、マウンダー極小期という太陽黒点減少による地球寒冷化、大飢饉が襲来。食糧生産を怠ったフランスでは２００万人が餓死。
　ルイ１４世の時代は、ニュートン等の科学革命の時代。それと共に軍制改革、特に軍管理システム改革の時代。
　太陽王を支えたのが財政面ではコルベール、軍事面ではルーヴォアだった。

軍管理技術の発達
軍管理の要諦は「補給の統制権は文官が握る」「税金で規則的に将兵に給料を払う」「歩兵・砲兵・騎兵を分け、戦場では互いに協力させる」であった。それに加えてマクニールが特に重視したのが団体教練であった。

団体訓練
陸軍長官ルーヴォアは将校に対し、「毎日、衛兵交代には必ず立ち合い、兵士たちに武器の操作を練習させ、行進させよ」と厳命した。

ルーヴォアの軍改革

　第１の改革：　銃操作を４２に分け、各動作を号令に合わせて一斉に行わせた。拍子に合わせて兵士全員が一斉に動作するので、射撃準備が整うのも同時で一斉射撃が可能となった。

　第２の改革：　隊列行進。最も重要な部隊運動は背進。横列の銃兵を前後に重ねて最前列の銃兵が射撃を終えると素早く背進して最後尾に下がり、再装填する。第２列が前面に出て射撃する。この横隊の段数を調節すれば、最後尾に回った列が再装填を終了すると同時に再び最前列に復帰し、２発目の射撃が可能となる。ナポレオンは１００人の横隊を２７列に重ね、粛々と前進・突撃し、敵中央を突破した。これをカウンター・マーチ戦法という。

　第３の改革：　軍の細分化。それまで大隊中心の戦場指揮を中隊・小隊に区分化し、兵士の個別指揮を徹底。将軍命令が迅速に兵士に伝達可能となり、軍は単一の脳神経を持つ生物体となった。

教練原理・団体行動効果

「集団が長時間、拍子を揃えて一斉に筋肉を動かしていると、集団に強力な社会的紐帯が形成される」という原理。教練には、あらゆる雑多な寄せ集めを、生命の危険・極限状況においても命令に服従する、団結強固なコミュニティーに変え

る力があった。しかも彼らは常備軍という共同生活で顔見知りという近親感情を生んだ。

人間紐帯・連帯感
当時は利益追求のみによる市場経済を主張するアダム・スミス（１７２３～９０）の時代。つまり周囲の世界が商業化というドライな人間関係に向かう中で、常備軍という心の深層に発する安定した感情に支えられた人工のコミュニティーが誕生した。
　教練が兵士達の日常となるや、ヨーロッパ諸国の軍隊は世界史上でも異例な剛勇振りを発揮するようになった。

団体教練効果の発見
マクニールは教練により仕上がった神経組織にも比すべき命令系統を完備した軍隊組織を、旧約聖書のレヴァイアサンに例え、人類が生み出した１７世紀最大の達成のひとつとする。（マクニール『戦争の世界史』）

常備軍による勢力均衡・辺境へ
常備軍はヨーロッパ中に広まり、安定をもたらす。どの国家も常備軍をもち勢力均衡し、他国への侵略は困難。彼らの目は自然に外に向く。西欧の沿岸諸国は軍を海外に適用し、東欧は辺境に目を向けた。王侯は「資本家階級の利益追求を許

すことにより、応分の税が増収できる」ということを学んだ。

戦意とは何か

ピークによれば、「戦場で大軍が対峙する場合、実際に衝突に至ることは稀で、衝突の瞬間にどちらかが戦意を喪失して敗走するのが常だ」という。従って戦場で最も重要なのは逃げない軍隊。植民地戦争では常に植民地側が逃げた。

　戦場で必要な戦意とは「味方を見捨てて逃げない精神」の事であった。

戦史考察の重要性
歴史の重要な要素は戦争。だが日本人は戦争を直視せず、それを語らずして平和を語る。「外国が攻めてきたら、降伏すればよい」「殺す側にまわるより、殺される側に回ったほうが良い」などという人がいる。彼らは「降伏は悲惨であり、簡単にはできない」ことを知らない。

ナポレオン戦争で世界が驚いたのは、以前はフリードリッヒ大王に率いられて精強を誇ったドイツ軍が戦わずして逃走したことだった。従ってドイツはイエナの戦いの後、直ちに和平を申し入れた。だがナポレオンは戦意の無いドイツ軍を見て「ここで和平してはもったいない」として和平を拒否、ドイツ軍を追撃。首都

を占領し更にロシアとの国境まで追い詰め、和平に応じた。つまり降伏も簡単にできない。この近代戦争の経験からクラウゼヴィッツの『戦争論』が生まれた。

『戦争論』
この書は二つの重要な戦争原理を提示する。一つは「勝者は敗者に対して戦力差に応じた賠償を強制する」という原理。ナポレオンは敵の戦力を可能な限り破壊してのち講和に応じた。戦力とは武力と戦意の相乗で、クラウゼヴィッツは戦意の破壊を重視。

『戦争論』はこの原理を「目的はパリ、目標はフランス軍」と表現。これを日本人は「目標は目的達成のための当面の課題」とする。「フランス軍を毀滅し、その戦意を破壊した後でなければ、パリを占領しても無意味だ」という意味。

もう一つは「戦争は他の手段をもってする政治の延長」という原理。この原理も日本人は「交渉が行き詰まった後に戦争で決着」と考える。だが逆である。武力行使で簡単に目的が達せられるなら、戦争で片をつければよい。だが相手が強力で、戦えば損害も大きく、自己の目標利益が武力行使のコストをカバーできないとみれば交渉なのだ。この原理が苛酷に実施されたのが植民地戦争であった。

ナポレオン戦略
彼の強みは国民皆兵による圧倒的動員力。それにより外国を侵略し、その収奪により戦力を再生産する。つまり飢えた国民を外国の犠牲で食わせ、戦力に仕立て

た。従ってその収奪は極めて苛烈であった。
　その収奪を最も激しく受けたのがドイツ・プロイセンで、和睦を拒否され、ティルジットまで追い詰められて和睦。和睦条件は極めて苛酷で多額の賠償金に加え、国土の半分を失い、しかも仏軍への従軍義務まで課せられた。更に最高価格法で搾取された。

最高価格法：　仏革命政府は軍隊に食糧を供給する為に最高価格法を制定し、食料・必需品に上限価格を設けた。当然、生産者や商人は売り惜しみ隠匿する。これを革命政府は取り締まり、法定価格で買い上げた。ロベスピエールの恐怖独裁政治の時代だからできたことだった。
ナポレオンはこの制度を占領地で発動。征服された国民は徴税と最高価格法により、２重に搾取され、その上でフランス軍として徴兵された。ナポレオンは１３０万の兵を徴兵したが、その半数は占領地の兵であり、ロシア遠征軍６０万の内、本国兵は僅か２３万であった。このように降伏とは実に苛酷なものなのだ。
従ってドイツにとって降伏は耐え難い屈辱。これをティルジットの屈辱という。
屈辱からドイツは立ち上がる。それには国民軍が必要。農奴解放が必須だった。

ドイツ軍の再建：シャルンフォルストの登場
彼は国民軍創設に邁進し軍制改革に集中する。その根幹は将校の能力に基づく選抜と教育だった。その為の学校を設立。（渡部昇一『ドイツ参謀本部』）

　ドイツ軍崩壊は軍規律・倫理の崩壊にあった。ドイツは従来、質実剛健に地道に国家を戦争の為に組織化し成功してきた。特にフリードリッヒ大王は軍事力を強化し、軍紀を厳正にし、猛訓練を重ねて、欧州最強の軍隊を作り上げた。こうした伝統あるドイツ軍が戦わずして戦線を離脱した。ドイツ軍の戦意喪失には原因があった。大王以後の皇帝及び側近の優柔不断・怠惰、腐敗であった。

　シャルンフォルストの改革の第一は「頽廃した軍規・士気・戦意の回復」で、農奴解放により身分差を縮め、兵士と共感できる士官の育成が必要だった。
彼は士官学校でカント哲学を教える。批判哲学が「人間の道徳的意思に尊厳を求めるもの」だったからだ。
これにドイツ哲学者・知識人が呼応した。その代表がフィヒテであった。フィヒテは、ドイツ国民の祖国愛・民族の誇りを覚醒すべく『ドイツ国民に告ぐ』を叫び続けた。それは「今はどん底だ。だが将来は明るい、手を携えて頑張ろう」であった。

　要するに、戦意とは「味方・仲間を見捨てて逃げない倫理」であった。

フランス軍の強みは大量動員の国民軍だけではなかった。それは地図・参謀部・書式命令・師団編成よりなる大軍の指揮法であった。

参謀部：　地図を読み解き、現実の地勢を想定し迅速に部隊を移動させる幕僚参謀が必要となり、書式命令伝達が可能となる。

師団：　戦場に全軍を迅速に移動させるために、軍を分割し多くのルートで移動させる必要が生まれ、師団が編成された。

参謀本部創設：　このフランス軍に対抗すべくシャルンフォルストは参謀本部を創設。これは戦場の将軍の幕僚参謀ではなく、常設の参謀組織で、単なる戦場への戦力の移動・集中だけではなく、平時において動員計画を立て、開戦と同時に大量動員し、いち早く戦場に赴かせる。つまり動員まで含めた兵力集中だった。１８７０年７月の普仏戦争において、ドイツ軍はあっという間に動員し、鉄道輸送を有効に使って、セダンに殺到し、動員途中のフランス軍を包囲。９月にはナポレオン三世を捕虜にした。その間僅か６週間。これが世にいうドイツ電撃作戦。

では日本は西洋軍学「戦意・団体訓練原理」をどのように受け入れたのか

何故薩摩軍と長州軍は強かったか。厳しい団体訓練を受けた国民軍だったからである。奇兵隊は士農工商が平等に扱われる軍隊で、実質国民軍で一日１３時間の猛訓練を受けた精鋭だった。一方、薩摩は人口の４０％が武士という異常な藩。

百姓同然の生活をしながら、武士の誇りを堅持し、郷土意識・団結心が強く、常時、自ら団体で鍛錬を怠らない戦意旺盛な郷士がその兵源であった。まさに郷土愛に燃えて戦う国民軍といってよい。（『ウィキペディア』薩摩藩）

日本人は意外と世界事情に通じ、特に軍事を学んでいた。ペクサン砲はクリミア戦争で初めて使用されたが、同時期に来航したペリー艦隊に乗り込んだ浦賀の与力が米艦の巨砲を見て、「これはペクサン砲か」と尋ね、アメリカ側を驚かせた。（井上勝生『幕末・維新』）

　このクリミア戦争で生まれた兵法書が『アルタン・デュ・ピークの軍事理論』。村田蔵六はこれを学び、長州軍を指導した。

　クリミア戦争ではロシア軍はマスケット銃。英仏軍のミニエー銃に正面から戦って損害を重ねた。両銃の射程は５倍の開きがあった。そこで彼らは塹壕に身を潜め、敵が射程内に接近するまで待つようになった。

　奇兵隊はこの戦術を採用していた。これに驚き、狼狽した連合軍は自らの補給体制の不利を悟り撤退した。

　西欧列強は赤子の手をひねるようにアジアを蹂躙してきた。彼等は日本に来て初めて簡単に逃げない強敵に遭遇した。

日本の軍制改革・西洋銃陣
長州藩は１８５９年に、御前会議において、時代は軍備の必要となる時代だとして西洋銃陣つまり西洋軍制を目指すことに決めていた。
驚いたことに、１８５２年に高梁藩で、山田方谷が庄屋クラスの子弟を集めて農兵隊を組織し、西洋銃陣を採用していた。その訓練を目撃した久坂玄瑞は大きな感銘を受ける（『ウィキペディア』西洋銃陣）。

長州藩でも西洋銃陣採用の陰には、來原良蔵という先駆者がいた。彼は黒船来航直後に神奈川警備に派遣され、そこで中島三郎助から西洋銃陣について聞かされる。彼は吉田松陰の親友で、周布・桂と親交があった。彼等が西洋兵学に目覚めたのは來原の影響。長州藩は來原に藩士と共に長崎海軍伝習所にいき、西洋銃陣習得を命じた。当時伝習所は海軍だけでなく陸軍も伝習していた。

來原は伝習所で西洋兵術を学ぶが、特に着目したのが号令や太鼓で一斉行動をとらせる団体訓練だった。彼は自ら西洋式軍太鼓を買い求め、昼夜の別なく、太鼓に合わせた歩行訓練を繰り返し、引き連れてきた藩士達を徹底的にしごいた。前原一誠は「足の痛みが激しく、座ることもできない」「良蔵兄はよく勉強され、号令もオランダ語でさっぱり覚えられない」と友人への手紙で嘆いた。
　このように長州の西洋銃陣は団体訓練による戦意の涵養という核心を突いたものであった。（『ウィキペディア』西洋銃陣）

一方、幕府の西洋銃陣は武器と兵数を揃えただけで戦意の醸成をなおざりにした。
１８６６年、英国公使パークスは、幕府のマスケット銃装備の西洋銃陣部隊を閲兵。だがパークスの目には「極めて平凡な補充兵」としてしか見えなかった。一方長州兵については「優秀なライフルを装備し、しかもそれを使い慣れている」と評価。彼は的確に練度の差を見抜いた。(『幕末・維新』)
パークスは幕府銃隊が両刀を携えていることに驚いた。一方奇兵隊は銃のみの軽装歩兵。それ故、小隊・分隊単位の機敏な機動作戦が可能だった。更にパークスは「幕兵がそれぞれの主人から給料をもらっており、一つの制度に統一されていない」という弱点まで指摘している。

徳川慶喜も当然、西洋銃陣化を計画した。だが旗本等は抵抗し軍役を放棄し、金で農町民を雇い、軍役に換えた。従って組織化、指揮系統も未完成だった。そこをパークスは鋭く見抜いた。
幕藩体制は戦国時代の軍制組織をそのまま平時組織に転用したもので、大名⇒家老⇒組頭⇒物頭⇒平士⇒徒士⇒足軽⇒中間・小者の身分階層がそのまま、温存されていた（『士の思想』)。従って幕臣・藩士の西洋銃陣化は旧勢力の抵抗が強く、どの藩でも実現不可能だった。長州藩でも事情は同じだった。

長州藩の軍制改革
第１３代藩主・毛利敬親は藩の窮状に驚き、有能な藩士を身分に関係なく抜擢し藩政改革に取り組む。その際、重要事項は藩主隣席の下での御前会議で決定することにした。御前会議は実務役人を中心として藩主の下に結束して藩を指導する体制で、従来の家老を頂点とする体制からの革命的脱却だった。
　１８６１年の御前会議で、長井雅樂の積極的開国の「海外遠略策」を決定。この遠略策を、西洋銃陣を標榜する來原良蔵は積極的に支持した。（『幕末・維新』）ところが開国は下関交易を窮地に追いやる結果となり、さらに攘夷論の朝廷から、朝廷を誹謗するものとして批判される。すると長州藩は翌年、一転して御前会議において破約攘夷・攘夷実行を決める。
　一方、大多数の藩士は西洋銃陣に頑強に反対し、來原は長井雅樂と共に窮地に立ち、遠略策失敗の責任を取り、自害する。

　１８６２年の破約攘夷の決定は尊王攘夷派の周布や木戸によって主導された。かくして長州藩は尊王攘夷の改革派が政権を握る。

攘夷実行・下関砲撃事件
攘夷には外国に対抗できる西洋銃陣が必要。だがそれに反対する勢力も強力で藩が分断。ここで攘夷改革派は決意する。
　木戸は「今日より覚悟を決める。長州を一丸としなければ、真に勤王の決戦は

できない」とし、周布・高杉と秘策を練る。それが下関での外国船砲撃。
　周布達はこの攘夷戦を「卵をもって石に投ずるに等しい」と認めていた。だが藩士が一丸となり、内陸に引き込めば戦えると踏んだ。つまり「藩士を奮い立たせる為には長州藩をして死地に入れる」以外にない。（『幕末・維新』）
　周布達は勝算をもっていた。実は來原良蔵亡き後、軍事面を指導したのは村田蔵六だった。蔵六も勝算を持っていた。

余談：　下関砲撃事件直後の緒方洪庵の通夜の席で、福沢諭吉が村田に対し「馬関で大変なことをしたな。あきれた話だ」というと、村田は「なんだと、やったらどうだというのだ。打ち払うのが当然だ」と言い放った。当然、蘭学者だから開国派だと思っていた村田の剣幕に、福沢は驚き「本心か」と疑ったという。（『ウィキペディア』村田蔵六）
　蔵六は本心で外国も幕府も打倒可能と考えており、それをクリミア戦争から学び、確信していた。

　村田蔵六
西洋軍事文明は戦意の重要性と団体訓練原理を再発見し、これをルーヴォア、さらにフランス革命・ナポレオン戦争を通じてフランス軍により練り上げた。
　１８５３年、クノープはこの原理に基づいて、近代兵術書を刊行。蔵六はこの兵術書を自ら翻訳し、『兵家須知戦闘術門』を刊行した。

　クノープの軍事理論はピークの軍事理論に発展する。「戦場で最も重要なのは逃げない軍隊。士気を維持する指揮官の能力と連帯意識が必須」とし、更にアルジェリア戦争の経験から小規模な戦闘単位が決定的に重要という原理を学び、ピークが新しい軍事理論を形成した。
　薩長軍はこの原理を学んだ。

鳥羽・伏見の戦いで、幕府軍１５０００に対し薩長軍４５００が戦った。だが木戸が意外千万というほど薩長軍の完勝。直後のアーネスト・サトウの会津藩士からの聞き取り調査によれば「薩摩兵は小競り合いが巧みで元込め銃使用」「幕府の洋式訓練を受けた部隊は全く役立たず逃走」とある。（『開国と幕末変革』）
　明らかに薩摩軍は小規模な戦闘単位で戦っている。奇兵隊も総員４００名が７銃隊・８砲隊で編成されていた。

第２次長州征討の戦闘正面は小倉だった。征討総督・小笠原長行が九州諸藩を指揮して戦った。だが幕府軍は傍観するばかりで、小倉藩が単独抗戦を強いられる。だが、幕府軍に勝つチャンスがあった。肥後藩が参戦し、長州勢を圧倒する。だが小笠原は動かなかった。このことで肥後藩を始め、九州諸藩は総督への不信を強め、撤兵・帰国する。更に小笠原までが将軍家茂が死去すると、戦線を離脱。それでも小倉藩は戦いを続ける。小倉城が陥落しても香春に下がって抵抗する。だが小笠原は戻らなかった。

慶喜は自ら出陣して巻き返すことを宣言したが、小倉城陥落の報を受け、取りやめる。幕府は最も忠実な味方・小倉藩を見捨てた。味方を見捨てる将軍に指揮官の資格はない。この敗戦が幕府崩壊を決定づけた。(『ウィキペディア』長州征討)

西郷は幕長戦争の戦訓から、幕府に勝つ確信を持ち、彼我の戦闘能力比較において、自軍１に対して幕府軍１０と幕府軍戦力を見下した（「史談会速記録」26巻・『ウィキペディア』長州征討)。

幕府軍の敗因は、指導者幕閣の戦意・指揮能力の不足にあった。特に戦意の欠如は致命的であった。西郷はそこを的確に見抜いた。更に幕軍は、歩兵以外は役に立たないとした。事実、幕府軍には近代砲・砲兵が実質的になかった。実は長州軍が肥後軍に圧倒されたのは肥後軍のアームストロング砲であった。

蔵六は１８６３年１０月に萩に帰国、奇兵隊等を指導した。彼は各隊の指揮官を集めて戦術を徹底的に教えた。ピークの理論の実践。

蔵六は緒方洪庵の適塾の塾頭で、当時の蘭学の第一人者。彼は１８５６年に蕃書調書教授、さらに１８５７年には講武所教授に就任。その間一貫して、外交文書・新規洋書の翻訳及び兵学講義に従事。その語学能力はずば抜けていた。従っ

て、蔵六は外国事情に精通していた。１８５０年代前半当時の欧米輿論の話題の中心はクリミア戦争で、蔵六はこの戦争を熟知していた。

１８６４年８月に四国連合軍の下関攻略戦が始まる。蔵六の想定通り、艦砲の射程内は破壊される。だが上陸軍は至近距離で待ち伏せされ、突破できない。かくして連合軍は敗退する。全て蔵六の想定内であった。
蔵六は「才知鬼の如し」といわれ、全ての情報を勘案・計算して戦略を立てた。

クリミア戦争（１８５３～５６）
オスマントルコ及び英・仏と、ロシアの間の戦争。１８５３年にトルコとロシアが開戦。だが同年のシノベの海戦でトルコ艦隊が壊滅すると、ロシアの南下を阻止すべく、英仏が参戦。発端は宗教対立。

３９５年にローマ帝国が東西分裂。教会もコンスタンチノーブルのギリシア正教会とローマのカトリック教会に分裂。両教会はエルサレムの聖墳墓教会とベツレヘムの降誕教会の管理権を廻って対立、血みどろの争いを続けていた。

イスラムが侵入すると、ギリシア正教は北方のスラブ民族の間に進出。１５８９年、ギリシア正教会の総主教座はモスクワに移り、ロシア人にとって、パレスチナは熱烈な宗教的情熱の対象となり、聖墳墓教会はロシア正教の総本山とされる。

一方、カトリック教会にしても聖墳墓教会と降誕教会は絶対に手放すことができない聖地。彼らも戦争も辞さない覚悟で各地の国王に聖地保護を求める。
そこで国内にカトリックの大勢力を抱えるナポレオン３世はこの動きをナポレオン戦争で失墜した仏の国際的権威を取り戻す機会と捉え、クリミア戦争を野蛮なロシアから西欧の自由と文明を守るための十字軍戦争に仕立てる。

一方、英国の関心は通商で、トルコは英国にとって最重要輸出市場。従ってロシアの南下は最大の脅威だった。

グレート・ゲーム
ロシアの南下は英国のもう一つの植民地市場インドへの脅威でもあった。アーサー・コネリーの『北インドへの旅』がロシア脅威論の急先鋒。コネリーはグレート・ゲームという言葉を始めて使った。グレート・ゲームとはインド・太平洋への突破口を求め南下するロシアに対して、それを阻止せんとする英国の戦いで、クリミアで戦い、アフガン・インドで戦い、最終的には日露戦争まで続くとする歴史観。

この戦争は歴史の巨大な転換点として再評価される。その重要な視点は「ポピュリズム」と「戦争の産業化」。

「ポピュリズム」
「輿論によって政治が左右される事態」。当時の英国輿論は「ロシア脅威論」の覚醒・増幅で「ロシアはトルコ・ペルシア・インドを征服し、最終的には世界支配を目論んでいる」と主張し、「グレート・ゲーム論」は「ロシアの南下を防ぐ戦いは英国の宿命」とする。こうした輿論を背景に、英首相パーマストンはクリミア戦争に突入していく。

フランスでもキュスティーヌ公爵の『１８３９年のロシア』は「神はロシア人を腐敗したヨーロッパ文明を浄化するために遣わした」と主張。匿名出版の『ロシアと文明』は「これまで欧州にはラテン文明とゲルマン文明しかなかった。だが神は第３の文明・スラブ文明を広める使命をロシアに与えた。今後はロシアが欧州を支配する」という汎スラブ主義を主張。西欧を不安に陥れる
　フランスのジャーナリズムでも「ロシアとの戦争は必要・不可欠」という輿論が大勢を占める。

ロシアでもハイル・ボゴージンが「歴史を前進させるのは神に選ばれた選民・ロシア人の事業。世界の未来はスラブ民族のものになる」と声高に叫ぶ。こうした論調に押され、ニコライ１世もクリミア戦争に突入する。（『クリミア戦争』）

戦争の産業化
クリミア戦争は戦争の産業化という歴史上のエポック。

英仏軍は新式のミニエー銃を装備。ミニエー銃はライフル銃で、ライフルとは銃腔に螺旋を描く溝を切り、それにより弾丸に回転を与え、真っすぐ、より遠くへ飛ばす銃で、問題は弾丸を溝に食い込ませることだった。
１８４９年、仏陸軍のミニエー大尉が、平らな底面に窪みをつけた弾丸を発明。これで発射時の爆発圧により窪み部分が外に膨らみ、旋条溝に食い込むことができた。この銃は有効射程が約１０００ヤードで、マスケット銃は２００ヤード。

ミニエー銃の製造は高い精度を要し、製造が困難だった。この難関を突破したのが米陸軍工廠で、自動式フライス盤による大量生産技術だった。
直ぐに民間業者が後を追い、コスト低減のため積極的に外国からも受注した。この結果、武器の大量生産時代が始まり、戦争の産業化・死の商人の時代となる。

クリミア戦争の実態
動員兵力は露；２００万、英；２５万、仏；４０万に対し、戦病死は露；５０万、英；２万、仏；１０万。露の完敗だった。
原因は英仏の武器の優位性だったが、終局的には英仏の補給面での勝利だった。
英仏は海上輸送。ロシアは１２万５千台の馬車を使用。英仏軍は１日に５万２千

発の砲弾を撃ち込んだが、ロシアは発射回数を制限しなければならなかった。

ロシアはマスケット銃装備、だが扱い方をほとんどの兵士が知らず、銃剣突撃に依存。銃剣突撃に対して射程の長いミニエー銃は圧倒的に威力を発揮した。
　英仏軍は初めてミニエー銃を使用。その性能に気づくと、敵の射程外で戦うようになる。それに対し露軍の方も前線に塹壕を掘り、敵の接近を待つ戦法を取る。持久戦となり、戦線は膠着。砲撃戦となり、砲弾補給の問題となり、英仏が勝利。

クリミア戦争の教訓
兵站の重要性
塹壕戦術：　性能が劣るマスケット銃でも、塹壕その他の遮蔽物に身を潜め、敵の接近を待てば、互角に戦えることを示した。
ピークの軍事理論の確立：　クリミア戦争は「仏軍が多くの点で英軍より優れている」ことを示し、ピークの理論が確立した。

攘夷決行
１８６３年５月１０日の夜、攘夷が決行される。だが藩兵は使えなかった。京都から帰り光明寺に集結した尊攘激派の草莽（光明寺党）が使われた。
外国商船襲撃は成功する。これに対し欧米軍艦の反撃も強烈で、長州海軍を壊滅させ、陸戦隊が前田村を焼き尽くす。だが長州正規藩兵は動かなかった。

奇兵隊創設

驚いた藩は高杉を萩に呼び戻し意見を求める。彼の提言は草莽の崛起。「藩兵頼みにあらず」となれば、草莽による西洋銃陣しかない。高杉は奇兵隊を結成する。

**　これは、第一の革命御前会議に続く、第二の革命であった。**

長州藩の藩政改革

西軍だった長州藩は２００万石以上の領地を３７万石に減封されたが家臣を解雇せず、それ故家臣は忠誠心が厚く、貧困に耐えた。第１３代藩主毛利敬親は村田清風の再建策を採用する。村田は借金を踏み倒し、殖産興業に努め、防長三白・米・紙・蝋を増産し、拡販に努め、越荷方事業を起こす。（村田清風の天保改革）

越荷方事業：　諸大名は大坂・江戸・敦賀に蔵屋敷を構え、蔵米等を保管し蔵元商人に販売を委託した。下関も重要な北前船の寄港地。この点に注目した村田は、越荷方という機関を設け、倉庫業や積荷の委託販売、金融業等を行った。

このことは北前船にとっても、「大坂でより高く売れるもの」だけを大坂に持ち込めばよく、その他は下関で委託販売し、更に紙・蝋等の下関の特産品を大坂に持ち込めば、より有利な交易となる。この事業も飛躍的に発展し、藩に膨大な利潤をもたらし、幕末回天の資金となった。

総括

西欧文明は「戦意の重要性と団体訓練原理」を再発見し、万有引力の発見にも劣らない大発見として重視した。戦意とは結局「味方を見捨てて逃げない倫理」であり、それ故普遍的価値を持った。現在、団体教練を行わない軍隊はない。

欧米人はこの普遍的価値に対して常に、敬意を払う。中国を傍若無人に蹂躙した英仏が、日本では自国軍人が殺害されても報復せず、英海軍は徹頭徹尾、日本との戦を避けた。それどころか英公使の要請で挙行された日英両軍が隊伍を組んだ観兵式を英紙が新しい日英関係として賛辞を贈り、後の日英同盟を彷彿させた。

太平洋戦争でも英軍は火達磨で格納庫に突入した隼の操縦士を最高の栄誉礼で称え、マレー沖海戦で撃沈された戦艦レパルスの乗組員が日本の攻撃を讃えた。

私はフィリピンで、特攻隊発祥の地・旧マバラカット飛行場跡地のカミカゼシュラインと呼ばれた場所を訪れ衝撃を受けた。それは２０畳はあろうという大理石の英語の記念碑で、「日本人の至誠の勇気を讃えて」と刻まれていたからである。私はこれをフィリピン人が建立したものと思っていた。
ところが黒船会の酒井氏より、ペリリュー島に「ニミッツ碑」があり、「日本に旅するものあらば伝えよ。日本人が如何に勇敢に戦ったかを」と刻まれていると

ご教示いただきました。これはテルモピレーの戦いで玉砕したスパルタ王ラケダイモンの最後の叫び「スパルタを旅するものあらば伝えよ。スパルタ人が如何に勇敢に戦ったかを」をなぞった最高の賛辞です。ペリリューは最激戦地。
ここで私は初めて、フィリピン碑は米軍が建てたものであり、彼らが未だに敵味方の別なく「戦意の普遍価値」に最大限の敬意を払うことに気付いたのです。
特攻隊についても、当初バカボンブと呼んだ米軍が「これだけの自己犠牲を払える日本は想像以上の文明国家ではないか」と畏怖したといわれます。

戦後、米国は日本人の戦意復活を恐れ、第９条を押し付け、「戦争犯罪意識注入計画」を推進。お陰で日本は軍事予算を経済政策に回し発展しました。だが真の敵が日本以外だと悟ると一転して日本を味方にすべく安保条約を結び、日米同盟に発展させました。日英同盟から日米同盟へ、歴史は繰り返されたのです。

戦後の占領政策は実に穏やかな太陽政策でした。だがフィリピンに対しては宗主国スペインもアメリカも彼らを「バナナ食いのサル」と罵り彼らに十分な人格を認めませんでした。明らかに「戦意の価値」認識の差でした。

英霊に感謝。